

## 尾崎先生をお送りする

岩 下 紀 之

尾崎知光先生は、平成十年度をもって、本学の規則の定めるところにより定年退職されることとなった。先生はご健康でいらっしやるので、この日をお迎えになるのはめでたいことではある。しかし、お送りする学科一同としては、今後現職としての先生からご指導をおおげなくなるのを残念に思い、不安にも感じている。私は昭和六十三年に先生をお迎えしたときから親しくお教えを受けたことであるので、ここに回想を記しておきたい。

その前年度、国文学会の講演に先生をお招きしたのが、本学とのなれそめであったと思う。源氏物語についてお話になったと記憶するが、先生の毅然とした風格に接し敬意を抱いたことであった。ちょうどそのころ、愛知淑徳大学大学院の開設が準備されていた。国語学担当のしかるべき実績をもつ人材ははなはだ乏しく、全国的に国語学担当者を確保できないため大学院開設が頓挫したという実例は多いのである。さいわい本学は先生をお迎えし、以後国文学科は、博士後期コースの開設などの段階で苦勞したことがない。

そのころはまだ本学は文学部だけの単科大学で、学科も国文・英文・図書館情報の三学科であった。学生数も校舎も今よりずっと少なかった。気風は家庭的で、学長小林素三郎がご健在であった。こうしたおだやかな平和は長所であるものの、山の中の女子大のままではいいのか、今後の社会の変化にどう対応してゆくべきか、その方向性はどうかとい

うのが、差し迫った課題になつて来た。先生の御着任はこういう時期であつた。

先生は研究・指導・実務能力といつたすべてに堪能で、私にはその全体を把握する能力がない。象を撫でたその一端をここに書きとどめておきたい。それはなによりも、学科の指導者としてのご功績である。大学は教育研究の場であるといふことで、そのためにカリキュラム等々の整備がはかられるべきだといふことになる。まず大きな骨組みとして、必修科目を可能な限り少なくするという改革をはかられた。現在ほとんどすべての科目が選択制であり、学生は自分の学びたい科目を修得するのみで卒業単位を満たすことができる。このことは、その後の教養科目の自由な取り扱いにみられるように、社会の趨勢を先取りした先見性を示されたものである。一方では、講義・演習・卒業論文という全体像は、これを堅持して、現行の国文学科はそのまま踏襲している。私個人としては演習を今のように整備して下さつたことがなによりも印象に残っているのである。

大学院の指導にしても、先生は院生の自主性をなによりも重んじられた。今でも院生は研究者の卵という一面があり、研究の方向は自分自身で選択するしかない。それとともに、教師からの指示指導が適切でないならば、この大学院に在学する意味がないであろう。そういう難しいかねあいを先生はみごとに処理してゆかれるのである。また、なによりもご自身の研究の成果を学内の雑誌に惜しみなく発表して下さつた。先生ほどの実績をお持ちの方にとつて、発表の場はどこにでもあるのだが、わざわざ本学の国語国文に原稿をお寄せくださるのは感謝に堪えぬところである。後進のものは、国文学・国語学研究の水準をこの論文によつて確かめることができる。またこの国語国文は、御着任当時はあたかも、学級文集とでもいふべき親睦のための短歌や俳句の発表誌でもあつた。先生はこれをきちんとした学術誌に改めて下さつたのである。

このように記してゆくと、先生のご功績を書き尽くすことはできない相談なので、最後に個人的な御礼を申し上げたい。先年拙著をまとめたとき、先生は祝いの座に出席して下さつたのであるが、祝意をこめた句を口頭で述べて下さつた。

私には実作の才これなく、これに付け句で応ずることができなかつた。やむなく先生の風格を偲ばせる古句をもつて、この文を終えてみたい。

檀の木のはなにかまはぬすがた哉

先生、どうかご健勝にお過ごしくださいますように、また今後もお導きくださいますように、お願い申し上げます。